

通訳サービスのユーザー研究におけるナラティブ・アプローチの試み

森元亜紀子
(岡山理科大学)

Abstract: An Attempt to Apply Narrative Approach to the Reception Study of Users of Interpretation Services.

The purpose of this paper is to investigate how the narrative approach could be useful for listeners utilizing oral interpretation. For this purpose, interviewing was used to collect data from nine Japanese who participated in an English-to-Japanese mediated lecture held at a local community center. The interviews were analyzed using a narrative approach and revealed that different users would use the same words to describe their own experiences of interpretation, although the meanings that each user gave the words was slightly different due to their own individual differences. This suggests that such differences in meaning could only be brought to light through a detailed analysis of their narratives.

1. はじめに

本稿の目的は、通訳サービスの受容者（ユーザー）が、通訳者をどのように捉えたかに着目し、その手法としてユーザーへのインタビュー調査により個別の受容を取り上げ、さらに、ナラティブ・アプローチを適用することで見出せるものがあるか、検討することである。

サービスを提供する者にとって、そのサービスがどのように受け止められたかを知ることは重要である。通訳サービスも例外ではなく、Kurz (2001) も、会議通訳者は、顧客満足に関心を持ち、全力で彼らの期待に応えようと努めるべきである、と述べる (p.404)。従ってユーザーの期待をできる限り正確につかむために、通訳サービスがどのように受け止められるか、という受容に関する知見を積み重ねることが大切となる。

受容の研究は、文学での受容理論に始まり、Reception Studies (受容研究) と呼ばれ、通訳分野でも通訳のユーザーを対象に受容の在り方にアプローチされてきた。通訳ユーザーの調査手法は質問紙調査が多く、多数のユーザーにアクセスし受容の大きな傾向を見出してきた。一方、一ひとりの声を細かく分析し、受容現象の詳細を明らかにする試みはまだ少ない。

集まるデータ量が少なく、客観性も確保し難いからであろう。しかし同じ通訳を聞きながらユーザーの受け止め方が異なる事も少なくない上、その受け止め方をたとえ同じ言葉で表現しても、意図するところは語り手によって異なるケースも予測される。時間はかかるが、パターンを変えたインタビューを積み重ね、複数の現場を比較するなどして客観性を少しでも確保しながら、質問紙調査では取り上げられにくい声を分析する試みを蓄積する意義はある。

そこで本稿では、ユーザーが自分達の通訳者の受け止め方について語った際、どのような文脈でどのような言葉を用い、その言葉に込めた意味は何かに着目する。筆者による前稿(森元, 2018)では、ユーザーへのインタビュースクリプトをコード分類することで断片化し、異なるコードごとにまとめたユーザーのコメントから受容の姿を明らかにすることを目指した。本稿では、類似する別の講演会通訳のユーザーに事前に質問紙調査をした上でインタビュー調査を行い、そのインタビュースクリプトのコード分析ではなく、ナラティブ・アプローチによるシーケンス分析を試みた。目的は、同じコードで分類されるはずのユーザーの言葉の背景には何があるのか、文脈ごとに取り上げる事で見えてくるものがあるのか考察し、この手法によっても受容の探求が可能かを見出す事である。個別の声を一連の語りの中で読み取り、コード分析とは異なる視点から受容を見つめ、その知見が少しでも深まれば、通訳分野の受容研究においてこの手法を活用できる可能性もあると考える。なお、紙幅の都合上、本稿はインタビューすべてではなく、彼らが語りの中で使った同じ言葉を取り上げ、その言葉を発するに至る語りに着目して分析する。

2. 先行研究

2.1 受容者研究に関する先行研究

受容が多様であることは、現在までの研究で明らかにされてきた。まず 1960 年代半ば、文学作品の読み手に着目する「受容理論」(Reception Theory) が特にドイツで成長した(加藤, 1992, p.157)。ハンス・ローベルト・ヤウスは従来の文学研究が、作品の歴史研究に徹し、作品自体に着目してこなかったと指摘した。作品と対峙し解釈する読者に目を向け、議論の対象とし、読者は受動的ではなく「読者の知覚」をもち能動的だと述べた(加藤, p.156)。

この読者の能動性に注目した文学理論が、1970～80 年代にかけて、映画やテレビのオーディエンス研究に援用され、Media Studies (メディア・スタディーズ) や Cultural Studies (カルチュラル・スタディーズ、以下 CS) における Audience Research (オーディエンス研究) や Reception Studies (受容研究) という形に受け継がれ発展する。モーレー (1996) は、オーディエンス研究の大前提として、オーディエンスは常に能動的であること、メディアの内容も常に多義的で多様に解釈され得る、という二点を挙げる (p.11)。

1970 年代に始まった CS の創始者の一人、スチュアート・ホールは、“encoding” (コード化) と、能動的な受容、解読を含意する “decoding” (脱コード化) という概念を用いてメディアとメディアの受容者のコミュニケーションを捉え、オーディエンス研究の可能性を示した (Hall, 1973, p.5)。ホールは、コード化する側も脱コード化する側も、コミュニケーションの「単一の主体」ではなく、様々な解釈や実践がせめぎあう場と捉えた (吉見, 2000, p.69)。コー

ド化は、テキスト生産で諸々の概念が重層的に働く局面であり(吉見, p.71; 上野・毛利, 2000, p.96)、脱コード化は、コード化でテキストに付与された意味を受け手が自らの文脈に置き換えて解読する(Hall, p.9)。その社会的立場や属性により解釈は多様で、同じメッセージを受けても全ての人が同じように脱コード化するとは限らない。さらに、脱コード化の基準となる複数の解釈コードは「等価に多様」ではなく、不均衡である。つまり支配的なコードに基づく優先的な読みがある一方、個別的な立場でそれを逆に読み替えるような対抗的な読みも存在し、不均衡な多様性を“polysemic”(多義的)という言葉で表現した(Hall, p.9; 吉見, p.68)。

ホールのモデルにより、CS ではオーディエンスの多彩な読みに焦点が絞られていく(吉見, 2000, p.78)。メディア視聴者へのインタビューなどエスノグラフィー的調査も試みられ、性別やエスニシティ等属性の異なるオーディエンスが、自分達の日常の中でテキストをどのように観たかが分析された(上野・毛利, 2000, p.103)。さらに、どのような状況で受容するかという文脈自体も、重層的に絡まりあっており、受容を「日常生活の中のもう一つの集団的、個人的な語り」と捉え、どのように絡まり合っているのかを問う事が大切だと主張される(吉見, 2000, p.80)。

このように、受容の考察にエスノグラフィー的な分析を取り入れた点は、CSの受容研究の重要な展開だったといえる。特に受容そのものが複雑な場合、その場を詳細に捉える意義は極めて大きい。例えば対面通訳の場をみると、ユーザーが原発話を聞く時、言語的意味は訳出を待つが、話者の非言語メッセージは同時に受け止め、続く訳出を聞きながら通訳者の非言語メッセージも受容する。単独のテキストを受容する場合と異なり、このような複数のテキストをほぼ同時に受容する現場のエスノグラフィー的アプローチも今後さらに必要になるかと考える。

2.2 通訳における受容者研究

では、通訳研究ではコミュニケーションと受容局面はどう認識されてきたか。初期段階では、コミュニケーションの流れは「信号のやり取り」と捉えられた(ポエヒハッカー, 2000, p.107)。メッセージに「多重コード」が絡み合っているとされるなど「コンテキスト」には言及されたが、通訳者はその「回路」の中の「変換器 (code-switching station)」であり、言語処理を「記号化」と「解読」と捉えるに過ぎなかった。

一方、通訳コミュニケーションを人と人との「相互行為」とし、通訳者の役割を「交換手」ではなく、「相互行為における積極的な参与者」としてモデル化する研究も進む(ポエヒハッカー, 2000, p.103)。Anderson (1976) は、訳出は通訳者と、その“clients”(顧客)である“producer”(生産者)と“consumer”(消費者(いずれも筆者訳))の3人の行為者間の相互行為で生じると述べる(p.210)。その直線的モデルは、二言語の対話者に通訳者を中心に据え、通訳者もその相互行為を成立させる行為者の一人として位置付けた。

通訳研究では、当然ながら行為者のうち、通訳者に着目し、その内面での処理に関心が向けられた。コミュニケーションを成立させるため、言語知識だけでなく言語外知識も動員し「理解」に到達しアウトプットするとし、通訳者の文脈処理も着目された(森住, 2014, p.91)。ステンツル(1993)は、通訳者による起点テキストの理解に必要な「社会文化的状況」「知識」を、通訳コミュニケーションの流れに含めたモデルを提示した(ポエヒハッカー, 2000, p.109)。こ

のモデルで注目したいのは、受け手による処理もモデルに含んでいる事である。

ステンツル (1983) は、受け手側のプロセスを、“The receiver then perceives the interpreter’s message, processes it together with the situational and textual knowledge and perform the communicative function.”(通訳者のメッセージを受け取り、状況やテキストに関する知識と合わせて処理し、コミュニケーション上の機能を果たす(筆者訳))と記す (p.45)。ポエヒハッカー (2008) は、これを「相当に網羅的」と述べ、「話者が実現する段階」、「通訳者が実現する段階」、「受け手が実現する段階」から構成され、通訳者の「訳出処理モデルだけであるだけでなく、相互行為のモデル」であると指摘する (p.110)。

「受け手が実現する段階」で何が起きているのかを解明することは、通訳コミュニケーションの理解に重要である。しかしユーザー研究は、通訳者の処理努力に焦点をあてたものと比べ、多くはなかった。上述のステンツルは 1983 年に先駆けて、従来の研究がユーザーの期待を考慮していないと指摘した (Diriker, 2011, p.2; Kurz, 2001, p.396)。起点言語の情報全てがユーザーにとって同様に重要性を持つとは限らず、表面上の言語的忠実性の担保が訳出の質の基準であっても、それが必ずしも聞き手が求めるものとは限らないと述べた (pp.30-31)。通訳者がよしとするものと、ユーザーが求めるものとの齟齬を指摘するものであり、通訳者に偏りがちであった通訳研究に、ユーザーへの着目を促すものと言える。

ユーザーがより注目されるようになったのは 1980 年以降で、通訳の質が学術的に研究され始め、その判断基準としてユーザーの評価が取り上げられてからである(ポエヒハッカー, 2002, pp.295-296)。1990 年代には、ユーザーの期待や評価研究も本格化する。

質の基準に関する初めての実証研究は 1986 年の Buhler (Kurz, 2001, p.398; 新崎, 2017, p.168 ほか) によるもので、通訳及び通訳者の望ましい質について、会議通訳者らに調査した結果であり、通訳者の評価基準をもとにユーザーの評価を推測するものであった (Kahane, 2015)。

その後、通訳者視点からユーザー視点の研究へシフトし、通訳者による評価がユーザーの真の期待と一致する確証はないことを実証する研究が行われた。まず 1989 年 Kurz が上述の Buhler の研究に対し、通訳者視点での理想的な通訳を、ユーザーが期待する通訳と同一視することに疑問を抱き、Buhler が抽出した評価基準のうち、8 項目を実際にユーザーに問いかけた (Khan, 2015; Kurz, 1993, p.315, 2001, p.396)。この結果、ユーザーが重視する項目の順位は類似していたが、重視する比率に有意差があり、「優先パターン」が異なっていた (ポエヒハッカー, 2002, p.296; Kahane, 2015)。Kurz (1993) は、「ユーザーの期待は、ユーザーに尋ねる以外わかりようがない」(筆者訳)と明言する (p.315)。その後、Kurz はユーザー集団が異なれば期待も異なる、と仮説を立て、3 タイプの国際会議の参加者に質問紙調査をした結果、異なる評価プロファイルを見出した (Kurz, 1993, p.323)。

1989 年以降、複数の研究者がユーザーに評価を尋ねる調査研究を実施したが (Kurz, 2001, p.396)、多くは質問紙を用いた (Drikker, 2011)。調査手法の厳密性を問題視する声もあがるが、ユーザーに関する知見が積み重ねられる。例えば Collados Ais (1998) は、質問紙調査によりユーザーの “declared expectations” (表明した期待) と現場での

“actual evaluation”（実際の評価）は必ずしも一致しない事を示した（p.328）。通訳の「質」についてユーザーが何らかの期待を抱いても、実際に通訳を聴いたときに重視する「質」は違う事を明確にした。さらに Kahane(2015) は、同じ現場でも人により異なる期待を持つ可能性を指摘し、ユーザー各人の属性が捉え方に影響することを示した。

異なる文脈で生きる各ユーザーの評価が異なるのは必然とも言え、ポエヒハッカー（2002）も評価研究にはユーザーの評価を形作るものは何かを描写する事が必要だとし（p.297）、そのために複数の方法を用いた事例研究が必要だと述べた（ポエヒハッカー, 2008, p.191）。

本稿では、この「ユーザーの評価を形作るもの」を考察するため、インタビューの手法によりユーザーの声を聴き取る。そしてインタビューで得られたユーザーの語りを、一連の文脈から切り離さず、シークエンス分析であるナラティブ・アプローチを採用し考察する。従来の調査で明らかにされた通訳の評価基準（忠実性、声のトーン等）ではなく、ユーザーがどのように通訳者を捉え、それをどのように語ったかについて、可能な限り彼らが語ったままの流れの中で着目することにより、受容の不均一で多様な側面を見出し、今後の受容研究でナラティブ・アプローチにより探求可能なものがある事を示すことを目指す。

3. 分析の視座：ナラティブ・アプローチ

「ナラティブ」は、1990 年以降、社会科学の幅広い分野で質的研究の中核として関心を集め、この現象が「ナラティブ・ターン(物語の転回)」と呼ばれた（やまだ, 2007, p.54; イエルガポロ, 2013, p.1）。この「ナラティブ」に着目するナラティブ・アプローチの特徴で、本稿の目的に有効な点を二つ挙げたい。まず 1) ユーザーが語った「ナラティブ」をシークエンスとして捉えインタビュースクリプトをそのまま文脈の中で分析する点。ユーザーの言葉を、その言葉を出すに至った語りの中で捉え解釈することができる。2) インタビューをインタビュアーとインタビュイーとの「協働作業」として捉える点。その場での語り方や構造にも注目し、そこから生成される意味に着目する。従ってユーザーが聴かれ語りながら、通訳者の受容体験をどう表現するか、またインタビューの中でそれがさらに展開するのを見る事ができる。

スクリプトを細かく読む談話分析を取り入れた通訳研究は少なくない。Wadensjo (1995) や Roy (2000) は通訳を挟む会話を詳細に分析し通訳者の役割の多様性を示した（ポエヒハッカー, 2008, p.92）。また、ナラティブ・アプローチを通訳研究に援用した例は、灘光 (2011)、平塚 (2012) の研究があるが、いずれも通訳者にインタビューを実施した、通訳者に関する考察であり、ユーザーへのインタビューや考察ではない。しかしユーザーの語りを「ナラティブ」と捉え、それを文脈の中で捉え分析する事で、新しい受容の探求も可能かと考える。

この「ナラティブ」は様々に定義され（やまだ, 2007, p.54; 野口, 2009, pp.2-5 など）、さらには「あえて定義しないあるいはそのつど意味づけることで研究としての発展があったと考えるべき」（矢崎, 2016, p.48）とされるほど、いまだ確定されていない（リースマン, 2008, p.7; 矢崎, 2016, p.48; イエルガポロ, p.1）。ここでは「ナラティブ」の定義や、ナラティブにアプローチする立場について、本稿で採用するものに絞り概要を述べたい。

3.1 本稿における「ナラティブ」

ナラティブに関する先駆的研究とされるラボフとウォレツキーの研究（1967）はナラティブの形式や構造に着目しており、その影響力は強く、構成要素の有無でナラティブを定義する傾向が続いた（イェルガゴポロ、2013, p.3）。一方、広義に捉える動きもあり、中でも能智（2006）は、ナラティブの構成要素を含まない発話でも、「語られたことが語り手の主観的な世界を知る手掛かり」であり、その発話データ全般を「素材としてのナラティブ」と捉えた（p.25）。そして、「素材としてのナラティブ」の向こう側に「語り手に関する何か」が志向されており、人が語った言葉をもとにして、その経験や意味付けを探るプロセスがナラティブ分析とする（能智、2006, p.28）。本稿では、インタビューで得たユーザー達の語りを、この「素材としてのナラティブ」として捉え、その向こう側にあると思われる、受容の在り方、通訳者の捉え方を探る。

3.2 構成主義という立場とインタビューの捉え方

ナラティブにアプローチする立場として、野口（2009）は「構成主義」を挙げる（pp.20-21）。個々のナラティブそのものが何らかの本質を示すデータであるとする「本質主義」とは異なり、ナラティブが何らかの現実を構成していると捉え、どのような現実を構成しているのか、ナラティブを手がかりに理解しようとする立場である（野口、2005, p.223）。

「構成主義」の立場は、「ナラティブ研究の中核的方法」であるインタビューの捉え方にも影響を与える（やまだ、2007, p.67; リースマン、2014, pp.42-44）。やまだ（2007）は、インタビューは「語り手があらかじめもっていたモノを聞き手が質問して取り出していくというものではない。インタビュアーに問われることによって、インタビュイーが語ろうと意図した以上のことが、その場で共同生成される」とする（p.139）。この立場ではインタビューをする研究者は、「語り聴くという相互的な関係」の中で発生するナラティブに対して、その生成や発展に関与することは避けられず、「中立的な観察者」ではありえない（野口、2005, pp.224-227）。

本稿でも構成主義的立場からナラティブを捉え、インタビューはインタビュイーの完成した語りではなく、インタビュイーとインタビュアーの協働作業によるものとみなす。ユーザーが通訳者の訳出を聞いた体験について、インタビュアー（筆者）に聴かれ語りながら自らの認識を確認したり、新たな認識が生まれたり、語りの展開の中で通訳者の捉え方が構築されていくと考える。

3.3 本稿におけるナラティブ・アプローチの分析方法

ナラティブ・アプローチで広く用いられる分析方法に、「テーマ分析」と「構造分析」がある（リースマン、2014, p.36）。テーマ分析は言葉で「語られた事」、つまりナラティブの内容に着目し（p.102）、構造分析はナラティブが「どのように語られたか」という語り方に焦点を当てる（p.156）。細かな言語的特徴や、声の調子など韻律的特徴も、ナラティブの構造として重視され、音声記録を頼りに分析されることが多い（灘光、2014, p.75）。

本研究ではまずインタビュースクリプトのテーマ分析的な手法により、通訳者をどのような存在として認識したか解釈した。うち4人のインタビューで自分の期待する通訳の喩えとして「字

幕」という同じ言葉が使われていたため、本稿ではこの語りに絞り、1) 彼らがどのような文脈で、どのような語り方で「字幕」という言葉を使っているのか、構造分析的な手法も取り入れて考察し、2) その言葉によって、何が意識されているのか、という点に着目する。さらに、通訳者についての感想が、インタビューの中で語られながら変化する様子、すなわち、「語る」その行為によっても「受容体験」が構築されていくプロセスをみたい。

4. 調査

本稿の調査では、以下に記す事例について、まず「ユーザー」と捉える調査対象者に質問紙調査を実施しその概要を把握した。その結果得られたデータをもとに質問を調整の上、半構造化面接法によるインタビューを実施し、そのスクリプトをナラティブ・アプローチにより分析した。分析の際、講演会で録音した音声記録及び映像記録も活用し、ユーザーの講演会中の様子をインタビューでの回答と合わせて確認できるようにした。

4.1 調査事例及び調査対象者

調査事例は、2019年3月14日に一地方公民館で開催された少人数の講演会である。題目は「呼吸法と感情の調整」、講師はフランス語を母語とする英語話者で、2014年に来日後、当該地域にある禅寺で修行をしつつ、整体師としても収入を得る。同公民館にて2017年から月2回開催されている前稿(森元, 2018)の調査対象事例でもある定期講座「フレンチリラクゼーション」の講師も務める。通訳の「ユーザー」と捉える本調査対象者は、本講演会の参加者14名で40代から80代の日本語母語話者である。性別及び年代構成を表1に示す。

表1 講演会参加者の性別及び年代構成

性別/年代	40代	50代	60代	70代	80代
男性			1人		
女性	1人		5人	6人	1人

この14名のうち4名は、前述の定期講座の受講者であり講師にも通訳者にも面識があったため、インタビュー調査対象からは除外した。他の10名は当該公民館管区の住民であるが、当該講師の講座の受講経験はない。なお、定期講座同様、本講演会でも、筆者が逐次通訳を務めたが、定期講座の受講者以外の10名とはそれ以前の面識はなかった。

4.2 質問紙調査

質問紙は、B4サイズ1枚の無記名形式で、講演会開始前に配布、講演会終了後全員から回収した。質問紙の構成は、年代の他、以下の表に示す、参加動機、講演会開始前と終了後の感想について、5段階評定法による選択回答法の質問を12問、及び通訳者の役割について自由回答法の質問2問である。選択回答法の回答の人数内訳は以下表2に示す。

表 2 選択回答法による質問と回答人数(質問 3-1 に 2 名、及び 3-4 に 1 名の無回答)

質問	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない
1(参加理由) 1-1.健康に関心	10	4			
1-2.講師が外国人	7	7			
1-3.英語や異文化への関心	10	4			
2(開始前の気持ち) 2-1.一切緊張しなかった	10	1	2	1	
2-2.外国人講師への不安		4		1	9
2-3.外国人講師へのわくわく感	8	4	1	1	
2-4.通訳者がいることに疑問			2	1	11
2-5.通訳者がいるのを見て安心	10	4			
3(講座終了後の印象) 3-1.開始前と違う		4	3	2	3
3-2.通訳がなくても理解できた。		3	1	6	4
3-3.通訳があったから内容を理解できた	11	2	1		
3-4.英語や異文化に興味があった	11	1	1		

まず 1) 講演会の主な参加理由は「健康」、「外国人・英語」であったと言える。2) 会場に入った時の印象は「一切緊張しなかった」、「わくわくした」が多く、「外国人講師への不安」はなかったという回答も多い事から、開始前の不安は全体的に低かった事が窺えた。一方「通訳者がいる事を知り安心した」を肯定する回答 14 名、終了後「通訳なしで理解可能だった」を否定する回答 10 名で、英語での内容理解に自信のない者も多かったと推測される。ただここに示される英語力の情報は極めて主観的である。ユーザーの英語力は通訳受容に大きな影響を与えるため、その客観的指標が得られなかった点は今後の調査で改善すべき課題である。

自由回答法による質問は、1) 通訳者の言語的役割、2) 通訳者が存在したことで言語以外に役に立ったこと、である。1) は、「内容理解」についての言及が多く、「難しい話も理解」「正確に」「詳しく」「自分が早とちりしない」等の表現が見られた。2) は、場の雰囲気への寄与を示す「空気が和んだ」「柔らかい雰囲気に役立った」「表情が和やか、雰囲気がよかったのでユーモアがより理解できた」「落ち着いた言葉で心に内容が残った」等で、「初めて通訳という職業の人を見たので楽しめた」や、「言葉の豊富さと表現方法を学ばねばと感じた」「通訳なしで英語が分かるようになりたいと思った」など学習意欲の刺激になったことも示唆された。

4.3 インタビュー調査の方法

インタビュー調査は講演会終了後 12 日間で、対象者 14 名のうち上述の 4 名を除き、そのうち連絡のとれた 9 名に対して実施したが、結果として全員女性となった。筆者による半構造化面接法による 1 対 1 のインタビューを 7 名に、残る 2 名はグループ面接を希望したため 1 対 2 のインタビューを実施した。面接開始前に「面接承諾書」により、本調査概要と面接の趣

旨、倫理的配慮を説明し、署名を頂いた。

インタビューでの質問は次の3つ、1) 会場に入った時、講師を目にした時、通訳者の存在を見た時それぞれの印象、2) 講座終了後、その印象に変化はあったか、3) 通訳者の役割(言語的・言語以外)である。インタビュー中、これらの質問以外に日常の関心や身の回りの事にも話が及び、1回50分から90分間の面接となった。終了後、スクリプトを作成、分析した。

5. インタビュー調査の分析

以下のスクリプトの記述では、A、B、C及びDはユーザーによる発話、Qはインタビューアの発話である。本文中の「」内はインタビュー内でユーザーが使用した言葉を引用したもので、スクリプト内の下線 は筆者による強調、()は筆者による説明の加筆である。その他の筆者の加筆については、各ユーザーのスクリプトの前後に適宜記載する。

5.1 「要点だけ」の象徴としての「字幕」

Aは、60代後半で、建築士兼カラーコーディネーターとして現在も民間企業に所属し勤務を続けている。仕事や旅行で渡航経験も多く、英語での日常会話は問題ないという。これまで、日本人と外国人観光客とのやり取りを、成り行きで手伝った経験が2回ほどあるが、通訳者として依頼を受けて通訳した経験はなく、通訳を聞くユーザーとしての体験も初めてであった。

Aのナラティブでは訳出の「丁寧さ」が否定的に捉えられていた。Aと同様、日常会話の英語力のある者がいたが、「高齢の方が多かったから、訳が丁寧で聞きやすかった」など、丁寧さを評価するコメントが得られた。しかしAは、通訳に「丁寧さはいらぬ、要点だけわかればいい」と繰り返し発言した後、Aが求める通訳の喩えとして「字幕」という言葉を使用した。以下に見るAの話の内容から、この場の通訳者の訳出に「要点だけ」を求めた理由として、Aに起点言語の理解があったというだけではなく、「講義」に対するAの意識も背景にあると考える。

Aの語り方には、常体と敬体を使い分ける「スタイルシフト」が多く見られた。以下、Aの「字幕」という言葉に至るまでのナラティブを、スタイルシフトに着目し分析する。まずインタビュー開始時に、当日の会場の感触について聞いた。以下引用中の【 】はQの相槌である。

Q1: (会場に) 入った瞬間何かありました、違和感とか？

A1: いえいえ(語気を強めて)。そんなことは。

Q2: どこに座ろうかな…とか、そういう不安とか。

A2: 私はね、わりとね、性格的に、講義があつたら絶対一番前に座るんですよ【ああ】。それが大好きで。【はい】やっぱ先生の、この1対1の【はい】感覚で見られるので、【はい】大好きで、前の方座るんですよ。だから今回も前の方へ座ってましたので。そんなに…

初めての場所での印象を聞かれ、A2で「私はね」とインタビューアの注意をひきながら、コミュニケーションでは「1対1の感覚」を重視すると話す。「絶対」や「大好き」という強い表現から、インタビューアにしっかり伝えたいという意識が表れている。語り方を見ると、「です」形である敬

体に終始しており、講演会当日は話す事のなかった筆者とインタビューで初めて言葉を交わすという社会的状況に適切な話し方を自然に選択している。

その後、講義中の通訳の印象に話題が移る。講義前半は中医学や呼吸法の説明が多く、参加者も静かに聞く授業的な雰囲気、この部分の通訳を、丁寧過ぎた、と語った。

Q3: もっぱら講師を見て聞かれてました？逐次通訳入りしましたが、訳は聞かれてました？

A3: 聞いてましたね、はい。【ああ、日本語を一応】それで、あの、ちょっと思ったことがあって。【はいはい】ま、あの、すごい丁寧に、何々です、まで言われてて【はい】、あの、こう、普通の、話す言葉？「何々です」、までつけなくていいんじゃないかな…、【ああ、はあはあ】とは思いましたね。例えば、えーとね、春が wood で、それで夏、Fire でしたよね？【そうでしたね】それで、ま、秋が鉄？【はいはい】こう言ってる、その説明が、春が何とか何とか「です」？【はい】、あの、先生が説明したら、春一木、夏一火、秋一金？冬が水？で、水「です」、まで。(中略)普通日本人の先生でも「です」まで多分言わない、うん。だから、あの、ちょっと、通…まあ、生意気なこと言うようですけど、【いえいえ】ごめんなさい、あのね、なるべく、こう、簡潔に【はい】、その、内容を伝える、「です」までこう長くセンテンスを伸ばすよりは【あ、はい】、もう春一木、こういう調子でいいんですね。春「です」じゃなくてもね？

Q4: 間延びする感じがあるんですね？

A4: そう、そうですね。あの、「です」はいらん、かなど。【ああなるほど】だからこう、ショートショート、映画でもそうですよね？映画の翻訳って、わりと、字数決まってるから、もう、なるべく省力化してその意味だけを伝える？っていう、あまり、こう、翻訳の所で間延びしない、ていうのがあると思うんです【はいはい】。だから、まあ、ああいう講座でも、聞いている方は、やっぱり聞くのって、私はそうでもなかったんですけど他の人って聞くのが、長時間はちょっと【そうですよねえ】苦痛な面があるので、なるべく、【はい】もう日本人が分かる？【はいはい】翻訳でいいんですね。丁寧さはいらんんじゃないかなって思いました。【ああ、なるほど】丁寧さはいらんかな、意味だけ伝えれば、と私なりに思ったんですけど。

Q5: 私も、何か、こう、伸びたなっていうのがあって。つい、こう、丁寧にしてしまうというか。

A5: やっぱりね、あの、普通だったら、先生が言った事をダイレクトで？【そうですよね】理解するところをもうひとつ【そうですよねえ】あるので、だからもう、用件だけ伝える？丁寧さは抜きの方がいいかな、と。(中略)はいはい。だから、何々です、みたいなきっちりセンテンスまとめて、書く時は必要でしょうけど【はい】話す時って、どこの国の人も、もう、短縮短縮じゃないですか【はい、そうですよねえ】。マクドとか、こう短縮短縮で話してるから、まあ、あの、そういう、聞く方からしたらもう、要点、がわかればいい。どんな翻訳の仕方でもいいかな、と、思いませんか？(笑い)

(____は敬体、___は常体を示す。筆者加筆。)

A3で「ちょっと思ったことがあって」という前置きや、「ま」や「あの」で語気を和らげ、「生意気なこと言うようで」や、「私はそうでなかったですけど他の人は…」と、途中、自らの指摘を和らげる前置き表現を入れ、通訳者でもあったインタビュアーを気遣う様子もある。この語り方は、インタ

ビュー冒頭のきっぱりとした語り方とは対照的である。さらに、A3 や A4 では敬体と常体が混在する。「まで言われてて」「いいんですね」「そうですね?」「思うんです」と、文章を締めくくるときは敬体を重用しつつも、「こう言ってる」「『です』まで多分言わない、うん、だから、…」、「じゃなくてもね?」など文中、文末でも常体も挿入し、小刻みなスタイルシフトが見られる。

しかしその後 Q5 で、インタビュアーが A の指摘を認め同調する。その際 Q は、直前の A4 が敬体で締めくくりとなる一方、常体で応えている。すると、それまで敬体に若干の常体が混在していた A の語りは、インタビュアーが常体の方に同調した事、さらに、「丁寧さは不要だった」という主張が受け入れられた事で、「やっぱし」や、しっかりと発音する「はいはい」などの強めの表現が現れ、ここからは敬体よりも常体を重用する。岡本（2013）は、です・ます形（敬体）と非です・ます形（常体）の使い分けには、地位などの社会的要因の他に、「人間関係の調整機能を果たす」という心的要因が影響しており、敬体は社会的心理的距離感を広げる時に、非です・ます形は狭める場合に使用されるとまとめている。A が当初敬体を重用したのは、通訳者であったインタビュアーに、訳出に対する否定的な指摘のインパクトを抑え、敬語を使い敬意を示し社会的な距離を保ち、次第に常体の重用にシフトするのは、インタビュアーがその指摘を受け入れ、笑いも含めた会話へと展開したことで、心理的距離感を調整し狭めようという意識が作用しているとも解釈できる。この後さらに、要点以上を訳すとその「丁寧さ」が「聞きやすさ」を阻害し、負担になりうると指摘し、さらに講師の雰囲気と異なるものであったと話す。

A6: 要点だけ、その方が聞きやすい【ああ】。まあ、スピーカーが言おうとする事を伝えればいいわけで、映画の字幕と一緒に、字幕見てたら、英語と全然違う表現、結構ありますよね？【はい】あ、これでいいんだって(笑い) だからあんまり、まあ、通訳ですから、しゃべった一から十まで、ほんとに正確に、だけど、映画のスーパーの、下見ると、全部訳してませんよね？【はいはい】あれね。もう抜かして抜かして、要点だけポンポンって書いてる。あれが、やはり、そういう通訳現場では必要かなと。やっぱお客様が退屈しないっていう【ああ】長く、先生の話だけでも長いけど、その、ダブルになっちゃうんで。やっぱし疲れ方がちょっと違うと思うんですよ【はい】。ショートにすることで、あの、翻訳の方をね。聞く方が軽減されるんじゃないかと思うんですよ【はい、長かったですからねえ(笑い)】だから、ほんと、要点つかんで(中略)ああいう会場で翻訳するときは、ほんとにショートで、多分聞く方も、じかに、こう、伝わってくるので。(中略)細かく訳されてて、けっこうきっちり、「です」まで言われて。すごい丁寧な方ねって。あの、講師の、フレンドリーな、話口調だったので、あの、通訳の方も、ほんとに、観客とこう、フレンドリーな感じで、先生の言ったことを、です、ますまで言わなくても、なんかそういうノリの良さ？こっちはのってるけど、こっちはのってないっていう。

「その方が聞きやすい」「退屈しない」など、ユーザー視点で語り、通訳は「ほんとに正確に」と言いながら「ああいう会場で翻訳する時は」と、現場に応じた臨機応変さも求めている。その後 A は、通訳者を「丁寧な方」と表現し、訳出の「丁寧さ」を通訳者の個性として捉えている。それは、講師の「フレンドリー」な「ノリのよさ」とは異なる雰囲気であり、この現場での通訳者の

「のってない」「感じ」となり、講話が「じかに、伝わってくる」のを阻む。冒頭で「1対1の感覚が大好きだ」と主張したAにとっては、講師とのやり取りの直接感を阻害する。Aが喩えた「字幕」とは、通訳者の個性が表出しない、単なる言語面での貢献に限定した通訳の喩えだと考える。

Aの語りは敬体と常体の併用でインタビュアーとの社会的距離と親しみ感を調整し、笑いも含みながらテンポよく進んだ。Okamoto (1999) は、敬語と非敬語を距離感の調整だけではなく、望ましい対人関係を創り上げるためにも併用すると述べる (p.70)。ここでも、ほぼ初対面のAが、インタビュアーの訳出について「退屈しないように」や「疲れ」など否定的な言葉さえ出せるほどの雰囲気形成されていた。またインタビュアーもほぼオーバーラップする形で相槌を挟む。杉藤 (1993) は語り手を「エンカレジ」するあいづちの役割を指摘しており (p.18)、インタビュアーの合いの手のようなあいづちを受け、Aの語りが円滑に展開したともいえる。

5.2 通訳者の姿を隠す「字幕」

Bは60代後半で、地元のスポーツクラブに通い軽い運動とヨガも受講している。このスポーツクラブで今回の講師を見かけたことはあるが言葉を交わしたことはないという。家族と暮らす孫もいることが分かったが、詳しく話さなかった。講演会には、通常講座を受講中の知人から頼まれて参加し、題目の「感情の調整」にも関心は抱いたと話したが、英語に興味があるとは最初は口にしなかった。自分の英語力について、「全くだめだ」と語った。

Bの語り方はゆっくりで、間も多く、発話と発話を埋める言い淀み(フィラー)の多用が特徴的であった。藤崎(2005)は、人の音声情報の種類を、言語的情報、パラ言語的情報、非言語的情報と分類し、パラ言語的情報として、ゆっくり/早口という時間的な特徴も話し方(スタイル)に含めている (p.2)。従って、Bの語り方として、スピードや、フィラーの使用による会話の一時的停止、沈黙などの間という、時間性に関わる特徴に注目し考察する。

まず、インタビュー開始直後に受講動機について尋ねると、Bは「頼まれたから」と一言きっぱりとした口調で答えた。参加が自身の意思ではなかったことを強調するかのようであった。しかしその直後からフィラーの多用が目立ち、語り方が大きく変化した。以下、…は間を示す。

B1: あの一、いつもいいお話して下さるので、私たちだけで聴くのはもったいないから、あの一、お話をさせていただくんですけど、って、来ない？って

Q1: タイトル見られました？呼吸法と、そういうのには興味をもたれました？内容ですけど。

B2: まあ、あの一、アンガーマネージメントっていうか、…いろんなねえ、考え方とか、そういうふうなかなー思ったんですよ。「感情の調整」だからね。あの一、どう、どう考えてそうしたんか、調子悪いんだろうと思う人もいるし、何か無視したって考える人もいるし、その一、考え方ひとつで、自分の感情の持ち方が全然違うじゃないですか。ま、そういうお話しーもあるのかなーっていうふうな。で、まあ、そういったときに、そういった呼吸をね、実践すれば、こう、おさまるとか、そういう話かなーって、まあ、勝手にね(笑い)そういう風に思って。

Q2: 講師の方(チラシ「講師について」)まで見られました？どんな方が話するんかなっていう。

B3: はいはいはい。あの、〇〇(地域のスポーツクラブ)でもちらっと、お顔は。はいはい。

Q3: じゃあ、外国人だっていうのは、もう

B4: それは講座が始まる時、あの、来ようかなって思ったんですよ。その、フランス式ですかね？(中略)私、(公民館へは)全く来てないんです…けど、何かいい講座が始まるんだったら、と思ってたので。まあ、興味、もあって、それで今回の講演会にも声をかけて下さったんだと。

Q4: ああ、それは講師に対する興味ということですか？

B5: そうですねえ。うーん、その、ジムではヨガしてるんですけど、身体だけなんです。まあ非常に気持ちいいんですけど。まあ呼吸法とか。だから、まあ、…(5秒の間)興味もあつたし、

Q5: 講師に？それとも中身？

B6: うん、そう、それとまあアングーマネージメントみたいなお話かなというふうな期待…もあって。

Bの「興味」の対象が明確ではなく、インタビュアーがQ4とQ5で二度確認する。Q5の最後にB6の「うん、そう」が重なり聞き取られておらず、この返答は、Q5の「講師に？」に対するものと理解した。この「うん、そう」は極めてはっきりと発話され、それまでの言い淀むような響きとは対照的であった。「講師への興味」についてより詳しく聞くため、以下の質問から続けた。

Q6: ではその、講師が外国人であることに對して何か期待とか、何か思いはありました？

B7: うーん、とー…(5秒の間)英～語がね、聞けるかなーっと思って。

Q7: ああ、なるほど。では英語をすごく

B8: いえ、興味(語気を強める)があって、…(5秒の間)まあ、しゃべりたい、みたいなのはあるんだけど、口に出したことはないし。その、英語をよ(笑い)

Q8: 他で習われたりとかは？

B9: ううん。じゃないじゃない。ユーチューブを(笑い)聞いたりしてるんだけど、さっぱり(語気を強める)わからなくて。で、今回も講師の方が英語で、しゃべられてるじゃないですか。母国語じゃないわけじゃないですか。そしたら、こう、流暢なフランス語より、多分英語は、わりと文法に沿ったね、聞きやすいあれかなーっと思って。(中略)で、何にもわからなかったんで、ショックをうけて(笑い)。だから通訳さんがおられなかったら、何にもわからなかったなーっ。で、〇〇さんも、英語にね、すごい興味もたれて、英会話もされてるのかな？外国も何回もあれされてるから、「あれわかったー？」言うたら、「もう、もう全部分かったんでしょー？」言うたら、「いやあーわからないよー！」って言うてるから(笑い)、ちょっとまあ、「ああ、そうなのかー」思って。

音声記録で確認すると、「英語に興味がある」という自己開示にあたるB7までの話し方は、句点を打っている場所では平均して約3秒、…はそれより長い間があり、テンポもゆっくりであった。一方B7での「英語への興味」という自己開示直後は、歯切れのよい語り方に変わり、声のトーンもあがり、頻繁に笑いが入る快活な響きとなった。この語り方の変化から、この時点まで「英語への興味」を口にする事を躊躇していた事がわかるが、その思いの背景にある、英語を理解できない気遣いや自信のなさはB9にも読み取れる。英語学習歴も海外渡航歴も豊富な

知人に、講演会の英語をどの程度理解できたのか尋ねていること、そしてその人物さえもわからなかったと聞いて「ああ、そうなのか」、という安堵のような気持ちが語られている。この安心感は、逆に、理解できない事への気遅れや引け目があった事を示していると考える。

ここの語りでは、それまで散見したフィラーが出現せず、テンポも快活だった。森（2011）は、話し手のノンバーバル情報の全てが意志的に算出されたものではないと述べる（p.389）。つまり話者が何の目的でフィラーを使うのか、目的指向的な記述は不可能であろう。定延（2013）も、フィラーを、「『使おう』と意図されるものではない」とし、「話し手が状況の中で身を任せる行動の流れの型」とする（p.21）。しかし自己開示前のフィラー多用の傾向と、自己開示後フィラーが一時的に消え快活な語りに変化した点から、「英語への興味」を敢えて語らなかったと推測され、ゆえに B にとって「英語」が大きな意味をもつ事が示されているとも考える。

そしてこの英語への興味が、講座が進むにつれ通訳者への関心と重なっていく事が以降のナラティブに現れる。まず講座開始前の居心地として、普段は足を運ばない場所であり、ほとんどの参加者を知らず、疎外感を口にした。

Q9: なんかこう、緊張感とかがあってありました？ちょっとこう、どこに座ろうかなってか。

B10: まあ、どこに座ろうかなーというのは。そうですね。ま、多分、長い人の方が多いだろうから、ここの。何かね、よそ者みたいな感じ。(中略)通訳さんの方へ、注目がね、まあ、ほとんど何もわからないから～

映像記録でも、B は講演会中、人と言葉を交わす事はなく、最前列端に一人で座り、通訳者に一番近い席でもあった。講演会開始前、他の参加者達が雑談する中、一人で開始を待つ B は、目の前で同様に一人で座り資料を読む通訳者の姿に共感したかもしれない。そして講演会が始まり、冒頭で講師が「後半は参加者の皆さんと活発に話したい」と告げた。その時の躊躇した思いを語りながら、コミュニケーションの難しさを口にした。

B11: 後から？「お話はこのくらいにして」というふうな事言われてたじゃないですか。「いやーもうそれ嫌だなあ」思って。

Q10: あー、みんなでディスカッションみたいなのは嫌だって

B12: そうそうそうそうそう。

Q11: 聞くだけがいい？

B13: うん、あんまりこう、得意じゃないし。

Q12: それは、人とペアワーク、やりとりが嫌っていう、そういう抵抗感ですか？それとも英語を介さないといけないからっていう？

B14: いやいや、英語じゃあなくて、人との、何か思ってることが、ちょっとした言葉になって出てこないっていうか。だから、通訳さんで、まあ、こう、あの、ボキャブラリーもねえ、多いし、その、そういう事もちゃんとできないと、英語もね、まあいろんな意味があるわけじゃないですか。

単語についても。あ、こういう風に訳すんだ、とか(中略)単語がね、所々聞き取れるわけですよ。もう簡単な文ですよ、中学英語ぐらいのね。だけど、それをこう、訳される時に、ああ、全然自分の知らない意味っていうふうなのがあったので、はあー他の事もいっぱい勉強しないとね(笑い)。

人とのやり取りが「得意じゃない」こと、その理由として自分の思いを「言葉」で伝える難しさを述べている。講義中に聞き取れた英単語が、意外な訳になる事に気付き、「ああ、こういう風に訳すんだ」という B の言語的発見が、通訳者に対する関心へとつながっていることが窺える。

その後、講演会中の感想を話すうち、通訳者がある場に存在するよりも「字幕」で訳が提供される方がよかった、という語りに入る。

B15: ああ、うーん、どうかなあ、テレビなんかで、字幕が出る方がいいのかなっていう感じもしました。こう、同時通訳ででるじゃないですか。それは字を見るんですけど、ほとんど、その、その人(スピーカー)に集中して、ま、字も見れるけど、いう風な感じじゃないですか。でも、(通訳者の)動向にもものすごく注目が行くっていう感じ。

Q13: ああ、それは講師を見ずに通訳を見るっていう感じですか

B16: そうそう、そう、通訳の方に注目が行く、みたいな。(中略)そんな感じでしたね。視覚も。視覚も、講師がこうしゃべってるとこ見るんですけど、で…、通訳さんがね、こう、上手にね、しゃべられるのを、はーって(眺めるジェスチャー)して、そっちの方がね。だから、あの一、テレビで、字幕が出て、それをまあ、読んでいく? みたいな方が、こう、あの、主役に集中できるのかなーいう。そういう風な感じをもった。

Q14: じゃあむしろ、同時通訳でイヤホンか何かをした方が集中するっていうことですかね?

B17: そうそうそうそう。で、あの、やっぱり、こう、通訳さんに集中するみたいな感じで、(メモを)あんまり書かれてないんだけど、言ったことがね記憶できて、記憶だけで、そういう風に言えるんだとか、あの、内容よりね(笑い)通訳の動向の興味(笑い)やっぱりそういうふうには言えないと、私なんか、こう、すぐ忘れちゃうから、ええ? さっき何言ってた? っていうふうには(中略)それで、最初はね、一回、講演の内容をね、全部こう…講師が、こうされて、それをまあ、だいたいこういう流れでいくんですね、いうのを全てこう、簡単なメモにして、それに沿って? やるのかなーって。

B の語る「字幕」は、A の「要点だけ」の喩えとは異なる。B の「字幕」は、姿の見えない通訳者の象徴であり、通訳者が覆い隠された訳出を指すと考える。語り始めでは「主役への集中」に言及するため、一見、「字幕」は脇役としての通訳者の喩えとも思われる。しかしすぐ後の「上手にね、しゃべられるのを、はーって」という語りの背後にあるのは、当初は口にできなかった「英語への興味」と、「思ってる事が言葉に出ない」という B の引け目のような思いであり、それを具現化するように「上手にしゃべる」通訳者をつい見つめていた事が示唆されている。結果、通訳者のメモ取りや事前準備などに関心が向きその存在感が拡大され、スピーカーに集中できないという感想が生じ、「脇役」というより、姿が見えないということを求める声であると考えられる。

5.3 脇役という通訳者

CとDのインタビューは、希望により2対1という形式で実施した。インタビュー冒頭に尋ねた受講動機は、両者とも題目の「呼吸法」であった。Cは60代で公民館の英語講座の受講経験もあり、英語に関心があること、また、英国在住の娘夫婦が帰省するたびに英国人の娘婿とのコミュニケーションに悩み、英語に親しむ機会を求めているという。DはCの近くに住む友人で70代、英語との接点はラジオの語学講座を聴くだけだが、英語にあこがれはあると話した。両者とも講演会に来るまで外国人講師が日本語で話すと思っており、受講動機には英語の関心は含まれなかった。インタビュー前半、Cは講演会で期せずして英語を聞くことができた事を「得した」と繰り返し、講師が担当する通常講座にも申し込みたいと勢いよく話した。インタビューではCが会話の主導権を握っており、Dの発話にCがオーバーラップすることも多かった。インタビューの中頃、会場で通訳者の存在に気付いた時の二人の感想を引用する。

C1: 何、どこが主催してる？私、講座しか聞いてなかったから。割と人数的には小規模だったのに、こんな方が来られていいのー？っていうか。もったいないじゃないけど、ローカルなちっちゃな講座に、専門的な方が来られて、そこまでしてもらっていいの？って。すごくそう思いました。で、すーって、何かさりげなく。二人の感じが(中略)僧侶さんとのやりとりが、ぎくしゃくしてないから、あれー何か、スーっていつてる！って。何か息があってるって感じがすごい、きたから。

Cの通訳者の捉え方はこの時点では肯定的で、講師と通訳者の「息のあった」様子も肯定的に語った。一方Dは、講師の視線に着目し、そのつながり具合を否定的に捉えていた。

Q1: その、息があってるって感じられました？(Dに聞く)

D1: 向こう(講師)はジェスチャー豊かに、で、顔、こっちを見たら声がよう聞こえるのに、あっち(通訳者)を見て言われるから「こっちを見て言って！」っていうくらい、何かお互いに通じ合ってるなって。

Q2: それは、その、皆様の内容理解に何か影響ありました？

C2: うーん、なんか、やっぱりもうちょっと正面見ってもらった方がよかったかなっていうのは思った。だからちょっと気になった？あの、私たちに言ってるんだけどこちら(通訳者)をわりとよく向かれてた、よね？(Dを向く)(通訳者の)立つ場所もあるのかな、後ろの方だとまた違ったかも。

D2: 何か、二人でやってるのをこっちから見てたっていう感じだった。ときにはこっちをみておおげさにジェスチャーして下さるけど、しゃべるときには、こう、ね？(Cを向く。Cが「うん」とだけ答える。)通訳の方の方を見て言われる傾向が多かったから。あの、あの、おもしろいから、英語わかるかなって聞こうと思うんだけど、うまく聞こえない？(Cを向く)

C3: そうそう。それと伝え方が、正面向いて、こう、すると、あ、私たちに伝えてくれてるんだなっていうのと、やっぱり、通訳の方に向かって言って、さあ言ってって感じがあるから、ワンクッ

ションおいた感じがあるから、やっぱり、正面向いて言われる、その方がよかったかなって思います。(波線はオーバーラップ)

D1 で講師の視線が通訳者に向けられた際に感じた疎外感に言及すると、その否定的な語りをきっかけに、C の肯定的な語りと勢いある口調が変化し、「うーん」とテンポが減速する。C も講師の通訳者への視線に違和感を抱いてはいたが、これ以前の語りには表出しておらず、D の冷静な指摘がそれを思い出す契機となったと言える。また D2 でこのインタビュー中初めて、それまでとは逆に C の語りに D がオーバーラップし、二人が話し手と聞き手の役割をそれぞれ同時に果たしながら会話を進行させる。さらに、互いに「ね？」と確認しながら「講師と通訳者のつながり」がユーザーにもたらした疎外感の語りを構築していく。終助詞「ね」について水谷(1993)は、共同で話を作る態度を示すと述べる(p.32)。発話を一人の話し手が完結するのではなく、話し手と聞き手で流れを作っていく態度が基本にあり、これを「対話」に対して「共話」と表現する(p.32)。このやり取りを通して、講師と通訳者の「息の合った」つながり具合を肯定的の捉えていた C も、通訳者を「ワンクッション」と捉えなおし、「字幕」という言葉が生成される。

Q3: ああ、講師が言ってるのを直接聞きたいっていうのはあったんですよね？

C4: そうそうそうそう。通訳の方のは、予備。予備みたいな感じ？あの、手話じゃないけど、字幕みたいな感じで。画面をみているけど、通訳の方のは予備で聞いている、いう感じが、あの一、思いが、より伝わる？

C4 が語る「字幕」は、講師の「思いがより伝わる」ように講師とユーザーの間に存在感を出さない「予備」で、脇役としての通訳者の喩えと言える。当初通訳者を講師と「息の合った」「専門的な方」と評価し、その存在を肯定的に語った C が、講師の視線の動きで物理的に通訳者の存在が強調され、聞き手としての疎外感を D と共に思い出しながら、つながり具合を否定的に捉え直している。C が、D との「共話」的やり取りでナラティブを共に展開していくうちに自らの認識を改めるに至ったと考える。C の「字幕」には、聞き手の視界に入ることなく、「脇」で「予備」として言語的サポートを提供するべく待機する通訳者の姿が表現されている。

6. 考察

以上、インタビューで得られたユーザーの語りをナラティブと捉え、同じ「字幕」という言葉を使った 4 人の語りの一部に着目した。ナラティブ・アプローチにより、1) どのような文脈、語り方でその言葉が使われたか、2) 「字幕」という言葉で何が意識されているか、について考察した。

まず A は、当日の訳出に「丁寧過ぎた」と否定的に語ったが、それを敬体と常体のスタイルシフトにより時には敬意を示し、時には親密さを増す語り方で述べられ、通訳者本人であるインタビュアーとの距離感を調節しながら、否定的なコメントでも円滑にインタビューが進んでいった。その中で「要点だけ」で、講師の雰囲気とは異なる「丁寧さ」は含まない訳出を「字幕」とたとえた。起点言語の完全な再現ではなく、不要に長引かせずユーザーを退屈させないものであり、かつ、通訳者自身の「個性」は含まない訳出を求める声であった。

B は、フィラーや間の多い語り方で、インタビュー前半は自身の英語への興味が語られないままであったことが示唆された。講師に集中するために「字幕」がいいと語る一方、その前後で英語や通訳者への関心が明らかとなり、B の「字幕」とは、つい注目してしまう通訳者の姿を覆い隠すものであり、通訳者を不可視にするものの象徴である事が示唆された。

そして C と D では、当初肯定的に通訳者の存在を語った C が、通訳者と講師とのつながりを否定的に捉える D の語りをきっかけに変化する。C は D と共に語ることで、講師とユーザーとの間に介入する通訳者の存在への違和感を思い出す。そして二人で互いに「ね？」と確認し合う語りの中で、C は改めて通訳者を捉えなおし、その結果、当初評価した通訳者の存在感を否定する表現が、脇役である「字幕」であった。

このように、同じ言葉を使ってもその語りの内容と語られ方を詳細にみると、意識されているものが若干でも異なることがわかる。その違いの背景には、各人の経歴や現在の思いなどがある。さらに C の語りの変化が示す通り、語ることで自らの体験を振り返りさらに語りが展開する側面もある。やり取りの中で生成したユーザーの語りを詳細に分析することによって、受容局面の細微なレベルでの多様性が示され、また、振り返り語ることでさらに新たな語りが展開することもわかり、ナラティブ・アプローチが今後の受容研究に貢献できる可能性はあると考える。

「字幕」という言葉は、現場で生身の人間である通訳者が声として発した訳出を、活字に落とし込む比喻といえる。声としての言葉を文字に落とし込んだ時、何が変わるか。真鍋 (2018) は「声の力」が失われると述べ、その「力」とは、臨場感であり、また発語者自身によって具現化され、人間の内面や行動に影響を与える要因を指すと述べる (p.244)。しかし、「字幕」がいいと語ったユーザー達が一様に、「黒子」のように発話者としての内面を失った透明な通訳者を求めたとは言い切れないと考える。本稿で見た通り、ユーザーの生成した「字幕」という言葉の生成の背景は一樣ではない。A の「字幕」に喩えられたものが、言語に限ったものであることが示唆するように、通訳者という存在の、ある部分についての、限定的な喩えとも考えられる。例えば B は最後に、「講義中に講師と通訳者が単語の確認をしたりするやり取りを見て楽しかった」と、それまでと矛盾するような発言もした。ユーザーが求める通訳者像は多層であり、深く考察すると表面上の言葉だけでは見えてこない、さらなる受容局面があると考えられる。

7. 結論

本稿では、通訳サービスのユーザーへのインタビューで得た語りをナラティブ・アプローチにより分析し、彼らの受け止め方の背後にある細かな違いを書き出し、受容局面で何が起きているのかを示すことで、受容研究もナラティブ・アプローチにより探求できると示すことを目的とした。結果、同じ「字幕」という言葉を使ってもそこに込められた意味はユーザー間で異なる事が分かった。ひとつには、要点だけでユーザーを退屈させず、通訳者の個性を伝えない「字幕」、また、ユーザーの注意をそらさないために通訳者の姿を覆い隠す「字幕」、そして、あくまで脇役に徹するものとしての「字幕」という捉え方であった。さらに、共に語ることによって通訳者の捉え方に変化も見られ、新たな語りが生まれる様子も見られた。これらの点から、ナラティブ・アプローチにより受容の局面で何が起きているのかをみることは可能であると言える。

本稿はインタビュー数が少なく、分析した語りも限定的で、受容の大きな傾向を示すものとして扱うことはできない。前稿（森元，2018）の課題でもあったが、筆者自身が通訳者でありインタビューである事で意見の偏りがあったことも予想される。しかし日頃、通訳者は、忠実性をいかに維持するかなど理念上の普遍的な問いに答えようとしながら、現場独自の要請にも直面し、その場の個別的判断に悩むことがある。今回のような取り組みを積み重ね、ユーザーにも個々の思いがある事を知り、スピーカーだけでなくユーザーについて何らかの情報を事前に知っておくことも、普遍的な要請と現場独自の要請に、瞬時にバランスよく対応しやすくなるのではないだろうか。

今後は、筆者以外の通訳者による現場を対象としたり、聞き取りをするユーザー数を増やすなど、客観性の確保を心掛け、受容局面を明らかにする取り組みを続けたい。

【筆者紹介】

森元亜紀子（MORIMOTO Akiko）岡山理科大学他非常勤講師。キール大学大学院文学文化研究科修士、広島大学大学院国際協力研究科博士課程前期修了。連絡先：am1206@go8.enjoy.ne.jp

【引用文献】

- Anderson, R. (1976). Perspectives on the role of interpreter. In F. Pöchhacker & M. Shlesinger (Eds.), *The interpreting studies reader* (pp. 209-217). Oxford: Routledge.
- Collados Ais, Angela. (1998). Quality assessment in simultaneous interpreting: the importance of nonverbal communication. In F. Pöchhacker & M. Shlesinger (Eds.), *The interpreting studies reader* (pp. 326-336). Oxford: Routledge.
- Diriker, Ebru. (2011). User expectation surveys: questioning findings and drawing lessons for interpreter training. [Online]<https://pdfs.semanticscholar.org/ffa9/977c7d05a665eba39f97ecb8a83a3fff9aa.pdf#search=%27conference+interpreting+user+expectations+Kurz%27> (2019年10月30日)
- Hall, Stuart. (1973). Encoding and decoding in the television discourse. [Online]http://epapers.bham.ac.uk/2962/1/Hall%2C_1973%2C_Encoding_and_Decoding_in_the_Television_Discourse.pdf (2020年2月1日)
- Kahane, Eduardo. (2000). Thoughts on the quality of interpretation. aiiic.net. May 13, 2000. [Online]<https://www.semanticscholar.org/paper/Thoughts-on-the-Quality-of-Interpretation-Kahane/8616c6a3852f48879ccf03c26b1bc7d1a19c1061> (2019年10月30日)
- Kurz, I. (1993). Conference interpretation: expectations of different user groups. In F. Pöchhacker & M. Shlesinger (Eds.), *The interpreting studies reader* (pp. 313-324). Oxford: Routledge.
- Kurz, I. (2001). Conference interpreting: quality in the ears of the user. *Meta*, 46(2): 394-409. [Online] <https://www.erudit.org/fr/revues/meta/2001-v46-n2-meta159/003364ar.pdf>. (2019年10月3日)
- Morley, David. (1996). The audience, the ethnographer, the post-modernist and their problems. In Peter I Crawford & S. B. Hafsteinsson (Eds.), *The construction of the viewer* (pp.11-27).

- Denmark: Intervention Press.
- Okamoto, Shigeko. (1999). Situated politeness: manipulating honorific and non-honorific expressions in Japanese conversations. *Pragmatics*, 9 (1): 51-74. [Online] <https://benjamins.com/online/prag/pdf/00290ab5-ef7b-4164-9611-7ba9ff2553c5/prag.9.1/prag.9.1.05oka.pdf> (2020年1月7日)
- Pöchhacker, F. (2002). Examining expectations and norms Introduction. In F. Pöchhacker & M. Shlesinger (Eds.), *The interpreting studies reader* (pp. 295-298). Oxford: Routledge.
- Roy, C. B. (2000). *Interpreting as a discourse process*. New York: Oxford University Press.
- Stenzl, Catherine. (1983). Simultaneous interpretation groundwork towards a comprehensive model. [Online] https://www.academia.edu/389677/Simultaneous_Interpretation (2020年2月1日)
- Wadensjö, C. (1995). Dialogue interpreting and the distribution of responsibility. *Hermes, Journal of Linguistics* No. 14: 111-129. [Online] [file:///C:/Users/Morimoto/Downloads/25098-Article%20Text-58346-1-10-20170104%20\(1\).pdf](file:///C:/Users/Morimoto/Downloads/25098-Article%20Text-58346-1-10-20170104%20(1).pdf). (2019年10月9日)
- 藤崎博也 (2005) 「音声の音調的特徴モデル化とその応用」文部省科学研究費特定領域研究「韻律に着目した音声言語情報処理の高度化」研究成果報告書 [Online] https://www.gavo.t.u-tokyo.ac.jp/tokutei_pub/houkoku/model/fujisaki.pdf. (2020年1月20日)
- イェルガコポロ, アレクサンドラ (Georgakopoulou, A.) (2013) 「ナラティブ分析」佐藤彰・秦かおり 編『ナラティブ研究の最前線—人は語ることで何をなすのか』(pp.1-42) ひつじ書房
- 平塚ゆかり (2012) 「オーラルヒストリー・インタビューから見る日中通訳者の規範形成」『通訳翻訳研究』第12号: 69-82. 日本通訳翻訳学会
- 加藤行夫 (1992) 「文学史への〈挑戦〉」岡本靖正、川口喬一、外山滋比古 編『現代の批評理論 第1巻』(pp.150-169) 研究社出版
- 真鍋昌賢 (2018) 「声の力のつかまえ方 —大辻司郎の映画説明を例として」橋弘文・手塚恵子 (編)『文化を映す鏡を磨く: 異人・妖怪・フィールドワーク』(pp.244-260) せりか書房
- 水谷信子 (1993) 「共話」から「対話」へ『日本語学』第12巻第4号: 4-10. 明治書院
- 森元亜紀子 (2018) 「英語学習者としてのユーザーの受容の考察—英語通訳を介した地方公民館講座の事例報告—」『通訳翻訳研究への招待』第20号: 21-42. 日本通訳翻訳学会 [Online] http://honyakukenkyu.sakura.ne.jp/shotai_vol20/No_20-002-Morimoto.pdf
- 森住史 (2014) 「通訳者とコミュニケーション」『成蹊大学文学部紀要』第49号: 87-102. [Online] <http://repository.seikei.ac.jp/dspace/handle/10928/519?mode=full&locale=ja> (2019年9月2日)
- 灘光洋子 (2011) 「医療通訳者のアンビバレントな立ち位置について—インタビューをもとに—」成蹊大学文学部学会 (編)『異言語と出会う、異文化と出会う』(pp.3-46) 風間書房
- 灘光洋子・浅井亜紀子・小柳志津 (2014) 「質的研究方法について考える: グラウンデッド・セオリー・アプローチ、ナラティブ分析、アクションリサーチを中心として」『異文化コミュニケーション論集』第12号: 68-84. 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科 [Online] [file:///C:/Users/Morimoto/Downloads/AA11918773_12_07%20\(2\).pdf](file:///C:/Users/Morimoto/Downloads/AA11918773_12_07%20(2).pdf). (2019年10月20日)
- 延定利之 (2013) 「フィラーは「名脇役」か?」『日本語学』第32巻第5号: 10-25. 明治書院
- 野口裕二 (2005) 『ナラティブの臨床社会学』勁草書房

- 野口裕二 (2009) 「ナラティブ・アプローチの展開」 野口裕二 (編) 『ナラティブ・アプローチ』 (pp.1-25) 勁草書房
- 能智正博 (2006) 「”語り”と”ナラティブ”のあいだ」 能智正博 (編) 『〈語り〉と出会う ―質的研究の新たな展開に向けて―』 (pp.11-72) ミネルヴァ書房
- 岡本多香子 (2013) 「時代変化へのジレンマ 栃木県農村部で出産育児を経験した女性のインタビュー・ナラティブにみる「自己」理解への期待と反発」 佐藤彰・秦かおり (編) 『ナラティブ研究の最前線 ―一人は語ることで何をなすのか』 (pp.201-223) ひつじ書房
- ポエヒハッカー, F. (2008) 『通訳学入門』 鳥飼久美子 (監訳) みすず書房 [原著: Pöchhacker, F. (2004). *Introducing interpreting studies*. London/New York: Routledge]
- リースマン, キャサリン・コーラー (2014) 『人間科学のためのナラティブ研究法』 大久保功子・宮坂道夫 (監訳). クオリティケア [原著: Riessman, Catherine Kohler. (2008). *Narrative methods for the human sciences*]. California: Sage Publications].
- 佐藤彰 (2013) 「イントロダクション」 佐藤彰・秦かおり 編 『ナラティブ研究の最前線 ―一人は語ることで何をなすのか』 (pp.iii-ix) ひつじ書房
- 杉藤美代子 (1993) 「効果的な談話とあいづちの特徴及びそのタイミング」『日本語学』第 12 巻第 4 号: 11-20. 明治書院
- 上野俊也・毛利嘉孝 (2000) 『カルチュラル・スタディーズ入門』 ちくま新書
- やまだようこ (2007) 「ナラティブ研究」 やまだようこ 編 『質的心理学の方法 ―語りをきく―』 (pp.54-71) 新曜社
- 矢崎千華 (2016) 「ナラティブ分析を再考する―構造への注目―」『社会学部紀要』第 125 号: 47-56. 関西学院大学社会学部研究会
- 吉見俊也 (2000) 『カルチュラル・スタディーズ』 岩波書店